

～ セピア色の風景 ～

## 「冠婚葬祭」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

その昔、田舎では冠婚葬祭のほとんどが各家庭、自宅で行われていた。

急な出来事の不幸事は別として、父あるいは祖父宛にお呼ばれの案内がされた日は、子どもでもかなり前に分かった、というよりも子どもにも伝えられた。

特に結婚式。当時「オフルメ」と呼ばれていたもので、きつと「お振舞」だと思いが、開かれる日が分かったときから、一日千秋の思いでその日を待ちわびたものだ。なぜか分かったときから、急に一日が長くなった記憶がある。

ごちそうのなかった特にわが家だが、その時代、父や祖父が持ち帰る菓子や料理はあこがれそのものだった。結婚式るときは、「五つ盛り」や「七つ盛り」と称した鶴、亀、富士山などの箱入りの生菓

子。葬式、法事るときは焼き版入りの大きな饅頭、箱いっぱい詰まった真つ白な落雁（らくがん）など。自然と手が出そうとなると、「待て、待て」と手を叩かれ、その箱が開けられるまでは胸が高鳴り、開けられた直後は今度はどれを選ぶか目になったのである。

併せて、心躍ったのが折詰である。お膳に載ったであろう料理が、包み紙の中から出てきた。

父や祖父は、今か今かと菓子や料理を待つ子、孫を思い浮かべながら、早く帰ってやりたい気持ちを抑えつつ、他家で接待を受けていたであろうと今、想像する。

思えば、折詰の中身がいつ



もほとんど手付かずであった。

「あのころ、なるべく全部持って帰って、おめら（お前ら）にかせで（食わせて）やりでがら、お膳のほかに出された漬物やちよつとしたもので、酒飲んでいだんだ…」と、後に親父がつぶやいたのを覚えている。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める